底が突き抜けた」時代の歩き方 501

定年後の時間　体内時計　隆起する時間　決定的瞬間

定年後の時間

　ノンフィクション作家の加藤仁が０１．９．３０付産経で、《定年退職者たちの時計にまつわるエピソード》について書いている。

《昼下がり、定年を迎えてまもない元地方公務員は、私のインタビューをうけながら、しきりに時刻を気にしていた。前日から腕時計の電池が切れて、針が止まっているという。

　「いま何時になりますかね」

　このような問いかけを、ほぼ３０分ごとに発する。このあと予定がたて込んでいるのかと思い、尋ねてみたが、夕食までに帰宅すればいいとのことである。それなのに、なぜ時刻が気にかかるのか。

　「なぜでしょうかね。腕時計が動いていれば、こんなに気にすることもないのですが…」》

　加藤仁は、《元公務員は、仕事に追われつづけてきた在職中の習い性から脱けだせないでいるのかもしれない》と感想を記すが、この元地方公務員の場合、「定年の時間」が《腕時計の電池が切れて、針が止まっている》ところに象徴されている。自分の生きている時間もどこかで停滞しているのを感じ取っているのだ。腕時計の電池が切れたのであれば、新しい電池と交換すればよいという問題ではない。新しい電池と交換して針が動きはじめたとしても、もはや定年を迎えた自分には腕時計が必要ではなくなってしまっている、という問題なのである。だから、時刻が気にかかって仕方がないのだ。インタビューにも身が入らず、時刻を気にするしかないのである。つまり、自分のなかの時計の《電池が切れて、針が止まっている》という問題なのだ。他の事例もみられる。

《製薬会社の元管理職は、３０代のはじめに購入したゼンマイ式の腕時計を、毎朝時刻を定めてネジを巻くなど、定年まで大切に使用してきた。しかし定年後、本人によると「生活のリズムが狂った」ことによりネジ巻きの時刻が不規則になった。そのせいか、腕時計は壊れた。修理をたのむと「いまどき、こんな旧式の時計の部品はありませんよ」と時計店の店主から言われたという。

　「仕方なく電池で５年は保(も)つという腕時計を買ったが、ますます生活が怠惰になりそうでしてね。修理をしてくれる時計屋さんを友人から教えてもらいましたよ。安い電池時計が何個も買えそうな修理代でした」

　と元管理職は語っていた。》

　定年まで肌身に付けてきた腕時計は、自分の分身であった。この腕時計が時を刻むのに合わせて仕事に励み、一歩一歩階段を踏みしめながら会社のなかでの地位を手に入れ

て、定年に至った。腕時計は会社の時間に合わせて時を刻んでいたから、定年を迎えて会社の時間と異なる別の時間に即して過ごすようになると、《「生活のリズムが狂った」ことによりネジ巻きの時刻が不規則になっ》て、《腕時計は壊れた》。腕時計と共に、その腕時計に依存してきた自分も壊れていることを、「いまどき、こんな旧式の時計の部品はありませんよ」という時計店の店主の言葉は物語っていたのである。しかし彼は自分を救おうとはせず、腕時計の修理に固執して、腕時計の回復に自分の回復をも託すような選択をしたのだ。

《大手デパートの元会長は、独居生活を送りながら、ワープロに熱中していた。そのお宅を私が訪れたのは、１０年ほど前のことである。

「１日の大半をこの部屋ですごしていますからね」

通された居間兼書斎には、掛け時計や置き時計、小型の目覚まし時計などがあって、部屋のどこに身をおこうとも、すぐさま時刻がわかる。つねに時刻を意識することによって、ひとり暮らしにメリハリをつけ、日々流されないよう独自の工夫をしていたのである。おなじような工夫は、定年後に絵画を趣味にした電工会社の元幹部の自宅でも見うけられた。このひとも妻に先だたれ、独居生活を送っていた。》

自分の外にある時計が示す時刻に監視されることによって、《ひとり暮らしにメリハリをつけ、日々流されないよう独自の工夫をしてい》るとのことだが、時計にけっして刻まれることのない自分の時間が不在であることにおいて、すでに時計の時間の上で《日々流され》ているようにしかみえない。企業でトップの地位を築いたかもしれないが、外の時間に解消されることのない、自分が生きる時間は築いてこなかったことが、彼の引退後の生活から透けてみえる。引退前はさんざん時計の時間に管理されてきたのだから、会社とおサラバしたのであれば、時計の時間ともおサラバして、自分だけが生きてきた時間が命じるままに生きればよいではないかと思うが、時計の時間に支配される生活から抜け出すことはできないし、そんなことを思ってもみないのだろう。

《これとは逆に、定年後に技術情報を企業に提供する頭脳集団を結成したコンピューター会社の元技術者は、つとめて〝時間〟にとらわれないようにした。

「水が流れるような人生でなければ、いいアイデアは浮かびません。私自身、前の会社を辞めてからは腕時計も手帳も捨てたし、クルマのハンドルも握らないようにした。大企業の社員とおなじことをやっていても仕方ないですよ」

と元技術者は言っていた。》

この技術者が「前の会社を辞めてからは腕時計も手帳も捨てたし、クルマのハンドルも握らないようにした」のは、彼の意思においてそう決断したからではない。そう思いついたからといって、人間はそんなに即座に実行できるものではない。おそらく彼は会社の時間に管理されるなかで、自分の時間と付き合うことをやめなかったのである。自分がつくりだしてきた自分のなかの時間が、会社に連なる時間との縁をすべて断つように命じ、彼は素直に従ったのだと思われる。もし「第二の人生」というものが本当にあ

るとするなら、少なくともそれは「第一の人生」に流れていた時間とは全く異なる時間のなかでしか始まりようがないだろう。

加藤仁は、《自分を律したり、解き放ったり、それぞれにたっぷりある時間とうまくつきあいたい》という当たり障りのない感想で締め括っているが、「たっぷりある時間」という言葉にどうしても引っかかってしまう。定年後になると、本当に「たっぷりある時間」が誰にも訪れてくるのだろうか。そんなことはあるまい。会社で過ごしていた時間がそっくりそのまま浮くようになったから、「たっぷりある時間」に見舞われているようにみえるだけだ。会社に行かなくなったからといって、会社で仕事をしていた時間が全部自分のものになるわけではない。それは勘違いである。時間は使いこなせなければ、けっして自分のものにはならない。つまり、時間は生きられてはじめて、自分の時間になるのだ。会社で働かなくなることによって、人は「たっぷりある時間」に伸し掛かられてうんざりしているようにみえる。「たっぷりある時間」とは余白の時間であって、そこに刻み込むものがなければ拷問にも等しいかもしれない。

ゾウの時間　ネズミの時間

ロングセラー『ゾウの時間　ネズミの時間』のなかで著者の本川達雄は、次のように指摘している。「私たちは、ふつう、時計を使って時間を測る。あの、歯車と振子の組み合わさった機械が、コチコチと時を刻み出し、時は万物を平等に、非情に駆り立てていくと、私たちは考えている。／ところがそうでもないらしい。ゾウにはゾウの時間、イヌにはイヌの時間、ネコにはネコの時間、そして、ネズミにはネズミの時間と、それぞれ体のサイズに応じて、違う時間の長さがあることを、生物学は教えてくれる。」

「動物では、時間が体重の１／４乗に比例する。体長の３／４乗に比例すると言ってもよい。これはたいへん重要な事実だと私は思う。」

要するに、ゾウとネズミは体の大きさがあまりにも違うので、時間の流れる速度も違う。したがって、人間の使う「１年」という単位で計って、ゾウはネズミよりずっと「長生き」だと言うことはできない。心臓の鼓動や呼吸の総回数という、生物に固有の運動を寿命の基準に取れば、両者はほとんど変わらないということだ。本川氏は産経新聞のインタビュー（０５．９．３～８）でも、「ゾウの時間とネズミの時間」について説明を繰り返している。

「心臓のドキドキという鼓動回数を測った人がいて、哺乳類や鳥ではだいたい、どの動物も心臓が１５億回打つと死ぬ。例えばゾウは１分間にゆっくりと２０回くらい打って７０年くらい生きる。ネズミだと１分間に６百－７百回も打って１－２年の寿命」を終える。「小さい生き物は心臓の鼓動が速いし動きも速い。早く子供を産んで早く死ぬ。逆に大きいものは何でもゆっくりで長生きだけど、小さくても大きくても心臓が１５億回打つとだいたいみんな死ぬという関係ですね。」つまり、「動物の時間は体のリズムに比例する」という見方であり、「動物の時間というのは体の小さいものほど速く流れ、遅いものほどゆっくり流れる。そうすると、ネズミは全力で駆け抜けるような人生、同

じ１時間でもネズミにとってはものすごく密度の濃い時間、ゾウはその反対、という見方もできるわけです。」
　異なる種類の生き物の寿命の長さを比較すること自体の無意味さが主張されているのだ。ネズミはゾウの寿命など知らないし、ゾウもネズミの寿命など知らないだろう。だいいち、ゾウもネズミも自分の寿命に関心を持っているとは到底思われない。
「ネズミは短い間にいろいろなことをいっぱいやって、それを７０年かけてやるのがゾウ。心臓は同じ１５億回打ち、使うエネルギーも同じ３０億ジュールなのです。ですから、ゾウは長生きでいいね、ネズミは密度の濃い人生でいいね、という見方をすればいい。世の中平等という言い方もできます。」「ネズミとゾウの間では１８倍の時間差になるから、ネズミから見れば、ゾウの日常なんて動かないでただ立っているだけ、世界が違うといっていいかもしれません。」
　体験としては誰でもがわかっていることだが、ゾウとネズミの時間が違うなら、当然、「人間でも子供と老人では時間の流れが違う」のは明白だろう。
「エネルギー消費量で時間を計るということを考えれば、小さな赤ん坊はものすごいエネルギー消費量で、ネズミのように子供の時間はすごく速い。そして高齢者の時間はゆっくり流れる。そういう話になると、生きている世界も違うんだ、価値観も違うんだろうという話になってくると思いますね。
　だから、若い成人の時間の流れを中心にして、老人はそれより遅い、のろいから…という考え方は、非常に問題だと思いますね。」
　インタビューで興味深いのは、どの動物も心臓の鼓動回数がほぼ１５億回であるなら、それを人間に当てはめると人間の寿命は２６歳くらいになり、「ゾウのように体の大きい動物は長生きで、ネズミのように小さい動物は早死に、という体のサイズと寿命の比例関係」を総合的に勘案したとしても、せいぜい人間の寿命は「４０－５０歳」くらいという指摘である。「５百万年の人類の歴史の中で、この戦後の６０年を除いては、寿命は５０歳代以下でした。骨から縄文時代の寿命を調べた人がいます。あのころは幼児の死亡率が高かったので、その部分を除き、１５歳を超した人の平均値が３１歳。室町時代くらいまでその年齢で、ほとんどの人が４０前に亡くなっていたわけです。戦前だって平均が５０歳ですからね」ということであれば、現在の８０歳の寿命はどう考えればよいのか。
「何といっても医療の発達で感染症で亡くなる人が減った。また、自然界の動物は本来、口で食べられなくなったり、歯がだめになったら終わりなんです。けれども今は、自然界にはない入れ歯という〝人工臓器〟もあれば、軟らかい加工食品もある。
　それから、足が弱ったら食べ物を集めることができないわけですよ。だけど今は、車でいくらでも運んでくることができる。また、昔は冬になると寒さで老人が亡くなることもあったわけですが、冷暖房完備となった。」文明の恩恵という意味では、「『５０歳以降の生』というのは医療や技術によって人工的に作られた〝特別な時間〟といえる」し、「現代というのは莫大なエネルギーを使って長寿を作り出した、時間を生み出した」

とも言え、「例えば、今、電気を止めたら、病院が成り立たなくなります。機械が動かなかったら検査すらできないですよ。薬だって化学反応、エネルギーがなきゃできない。そういう意味では、エネルギーで時間、寿命を買い取っているんです。」
「私たちは先輩たちが持てなかった『老い』の時間、つまり、次世代を残すための生殖活動を終えた後の時間というものを手にした。それは技術の勝利で、まさに人間の人間たる誇るべき時間なのかも」しれないが、「私たちが次の世代の分のエネルギーも使っちゃうということはありますね。また、廃棄物などの〝借金〟も残してしまう」から、「本来、人間の体が使う分の４０倍ものエネルギーを消費して」いることを考えれば、「もう少しエネルギーの消費を落と」した生活を目指したほうがよいのではないかと勧める。

体内時計

目覚まし時計がなくても、ほぼ決まった時刻に目覚めることができるのは、脳の中に「体内時計」と呼ばれる、時間を計る仕組みがあるからだ。それも一つだけではなく、複数あるという説が有力になっている。体の中では大きく分けて、５つのリズムが刻まれているといわれる。一つめは約９０分のリズムであり、大学の講義の多くが９０分であるように、人間の集中力が続くのも９０分程度。睡眠中のノンレム、レム睡眠の時間も合わせて約９０分である。

二つめは昼間活動して夜眠るという、覚醒と睡眠を規則正しく繰り返す１日のリズム（サーカディアンリズム）である。この体内時計の「１日」は約２５時間で、１９６０年代に実験が行われ、複数の被験者に温度や湿度、照度を一定の条件にして時計がない部屋で生活させたところ、約２５時間周期で寝起きすることがわかった。人間は朝、光を浴びたり食事を摂ることで時計の針を進め、地球の１日との約１時間分のズレを埋めているのだ。

三つめは１週間のリズムである。５日間働いて２日休養し、平日の少ない睡眠時間を休日に補うなど、心身を１週間単位で調整している。四つめは約１ヵ月のリズムである。皮膚の再生や女性の月経がこのリズムの影響を受けている。五つめは動物の冬眠にみられるような、１年のリズムである。人間の睡眠時間は、夏は短く、冬は長く、春と秋はその中間という具合いに１年の中で変化している。

隆起する時間

「体内時計」は人間だけではなく、あらゆる生物が内蔵している。したがって、生物体にみられる周期性のある生理現象として、生物時計ともみなされる。しかし、人間には他の生物にはみられない唯一の、時間を隆起させる、いいかえれば、時間をつくりだす能力が備わっている。というより、隆起してつくられる時間の束のなかで自分という一個の存在を燃焼させようとする、激しい欲求に駆られて生き、その欲求を突出させようとする妄想に憑かれている。評論家の吉田秀和は０１．５．２６付朝日掲載の「音楽と時間」と題するエッセーで、こんなことを書いている。
《音楽は時間の芸術だが、彼は音楽をどこをとっても均等に流れる時間の中での出来事と考えなかったのだろう。聴き手を日常的時間の鎖から解放し、音楽にしかない時間の

中に解放しようとしたといっていい。
　私たちが時間を感じるのは朝、昼、晩といったもののくりかえしの中でだ。この時間は私たちの外にあり、生活はそれを軸に営まれる。「あれは何年前のこと」「この時私は幾つだった」といったよりどころがなかったら、私たちの生活は雲をつかむような境域を漂う影のようなものになりかねない。その意味で、時間は生活を構成する主軸として大変建設的な性質をもっている。》
　ここで「彼」とは、このエッセーが書かれる前に亡くなった指揮者のシノーポリのことである。私たちの外を流れる日常の時間のなかで生活は営まれるが、時間は単に流れていくのではなく、生活を構築していく重要な役割を果たしていることを説いているのだ。時間を発明したとき、同時に自我も発明したが、このことは、人間は自分の外を流れる時間を発明することによって、自分の内に流れる時間も発明したことを意味した。したがって吉田秀和が、私たちの外を流れている《時間は生活を構成する主軸として大変建設的な性質をもっている》というとき、同様に私たちの内を流れている時間もまた、精神（という言葉でいいあらわそうとする自分というもののなにか）を《構成する主軸として大変建設的な性質をもっている》ことに言及しようとしたのだ。そこで、《ベートーヴェンの交響曲を始めとする器楽はこの時間のもつ建設力をフルに利用した音楽の典型だろう》という指摘に踏み入っていく。
　ドイツ・ロマン派のＥ・Ｔ・Ａ・ホフマン以前に、フランスの文豪バルザックがベートーヴェンが死んで間もないころ、《この音楽の、まず全体があって、つぎに各部分が動員される大軍隊のような性格を言い当てていた》として、こう続ける。
《ここで敢えて補足すれば、ベートーヴェンでは、まず均等に流れる時間の骨組みがあり、そこにほぼ同じ容積の（しかし内容に変化のある）音楽の箱が積み重ねられてゆく。時間のスキームの外枠が安定していればいるほど、音楽の内部に蓄積されるダイナミズムは高められ、とどのつまりは未聞の迫力をもった音楽が出現する。
　（中略、指揮者の）ヴァントでは土台にがっちり安定したテンポが浄らかな簡素さとでもいった基調を生み、その上に、綿密に設計された変化が世の常でないような精神美の花を咲かすことができたのである。》
　ベートーヴェンの交響曲では、《まず均等に流れる時間の骨組みがあ》るのかどうかは私にはわからないが、《そこにほぼ同じ容積の（しかし内容に変化のある）音楽の箱が積み重ねられてゆく》という説明は、音楽の時間が何重にも隆起していくイメージとしてなら理解される。ベートーヴェンの音楽の時間の堅固で壮麗な構築そのことよりも、音楽家ではない小説家のバルザックが彼の《音楽の、まず全体があって、つぎに各部分が動員される大軍隊のような性格を言い当てていた》ことに、興味を覚える。おそらく音楽の時間と言葉（小説）の時間との相違を超えて、同じ自分のなかに隆起する時間を持った者の経験の共通性が交響し合っているのが感じられるのである。バルザックもまた、言葉を構築する時間を経験するなかから、ベートーヴェンの音楽を構築する手法を

みていたのだ。吉田秀和はこう続ける。
《しかし、よく考えるとこれは演奏芸術の奇跡で、主潮としては時代が下がるにつれて時間の均質性の感覚は脅かされ、遂には時間の流れの非連続性の意識が芽生えたり、その流れの一方向性への信頼もゆるぎだす。いわゆるチャンス・オペレーションの発想は時間の不可逆性への懐疑、反逆の結果、生まれたものである。
　それはまた時間を外部の指標から内部への眼差しに変換さすところにもみられる。ジョイス、ウルフ……プルーストの《失われた時を求めて》の時間との対決はずいぶん複雑な性格で、一方では永遠性の探究の手がかりでもあれば、一方では誰も逃れられない一本道の最後の道標ともなる。》
　ベートーヴェンの交響曲は、どうして「演奏芸術の奇跡」なのか。確信を持てないまま手探っていくよりほかないが、《主潮としては時代が下がるにつれて時間の均質性の感覚は脅かされ》ていく記述からすれば、ベートーヴェンの音楽はあくまでも「時間の均質性の感覚」の上に、《同じ容積の（しかし内容に変化のある）音楽の箱が積み重ねられてゆく》建築物にほかならなかった。つまり、《時間のスキームの外枠が安定してい》なければ、彼の音楽は成り立ちようがなかった。だから、「時間の均質性の感覚」がありえなくなった後の世からすれば、「演奏芸術の奇跡」としかいいようのない建築物ということになる。「時間の均質性の感覚」から隔たっているシノーポリがしたがって、ベートーヴェンを演奏するのに、《聴き手を日常的時間の鎖から解放し、音楽にしかない時間の中に解放しよう》とすることは、少なくともベートーヴェンに関してはそうではない、と吉田秀和は冒頭で異議を唱えていたのだ。
　ベートーヴェンからすれば、《聴き手を日常的時間の鎖から解放し》てはならないし、《音楽にしかない時間の中》に閉じ込めてはならなかった。なぜなら、彼の音楽こそは日常的時間に沈潜するものであったし、彼の音楽の時間は日常的時間とはけっして分断されてはおらず、融合していたからだ。日常的時間をないがしろにするところに芸術は生みだされず、日常的時間を豊かに生きることによってこそ、真の芸術は生みだされるという確信が通用する時代だったのである。もちろん、彼の時代においても「音楽にしかない時間」が強く隆起してくることによってしか、曲は生みだされることはなかったが、音楽の時間はそこでは日常的時間を土台としており、それにむかって自然に開かれていた。だがベートーヴェンの時代を過ぎると、もはや「音楽にしかない時間」は音楽にしかなく、日常的時間とは全く異質の時間として遠く離れてしまった。日常的時間を豊かに生きること自体が困難になってしまったのだ。
　ベートーヴェンの時代では、日常的時間は自分の内部をも流れている時間であった。だが日常的時間が自分の外にある管理支配される時間としての色彩を強めるようになったとき、人々は《時間を外部の指標から内部への眼差しに変換さす》ことをしいられていった。しかしながら、いくら自分の内部の時間を充足させようとも、人間が外部の時間から逃れることは不可能である。

《少年の時から社交界に憧れていた《失われた時を求めて》の主人公は望みを達した後、しばらく離れていた。そうして、ある日午後の集まりに出てみると、出会う人は皆「髪に粉を振りかけて〈変装〉しているように見え」合点がいかない。しかし、やがて、わかってくる。彼が遠ざかっていた間に「時」がたち、「時」が彼らを一人残らず変えてしまったのだ。小さく縮んだ女、かつての傲岸がたわいもない優しさに変わった男……。

「人形たちは歳月の非物質的な色彩にひたりながら、〈時〉を外部に示しており、ふだんは目に見えないその〈時〉は、見えるようになるために肉体を探し求め、肉体に出会えば所かまわずそれをとらえて、その上に自分の幻燈を映し出すのだった」(鈴木道彦訳)。

プルーストはこうして本来見えないはずの「時」が姿を現わした現場をとりおさえたのである。音楽と同じように。》

人々が自分の内部の時間に熱中している間に、外部の時間が流れて《「時」がたち、「時」が彼らを一人残らず変えてしまった》のであって、彼らが自分を変えたわけではない。要するに、自分がかまけていた「内部への眼差し」は少しも自分を外部に示すようには変えることはなく、逆に全く無頓着であった外部の「時」が人々を「時」の経過のなかで、《一人残らず変えてしまったのだ》。人々は《「時」が姿を現わした現場》を自分が気づかぬまま、自分の肉体に刻み込まれていることを差し出している点で、「時」の「人形たち」にほかならないことが示唆されている。人間には、自分で自分を変えることなどできやしない。自分を変えるのはすべて自分の外を流れている時間である。なにしろ「時」は人間を生誕させたり、人間を生の遠い向こう側に連れ去っていくほどの決定的な変化の猛威を振るうのだから、と断言されているようにみえる。

吉田秀和があらわしているプルーストの意図に沿っているのかどうかはわからないが、人間は外部の時間を遮断して自分の内部の時間に蹲(うずくま)っている間も、外部の「時」の経過に見舞われているのだ。外部の「時」の経過を抜きにしては、自分の内部の時間など存在しえない。したがって、ベートーヴェンの曲が示すように、ここで「内部への眼差し」は外部の時間の流れを取り込まなくてはならないのかどうかはともかく、人間の肉体というものは外部の時間に接しながら、刻々と変化に見舞われていることははっきりしている。「失われた時」とは膨大に流れていく人間の日常的時間にほかならないとすれば、我々は自分の「内部への眼差し」が一向に日常的時間を把握しないことによって、ますます深く「時」は失われていくのだろう。

ところで、エベレストの山頂などに立ったとき、多くの人が普段の日常時間とは全く異なる、「人間を超える時間の流れ」を感じるという。この「人間を超える時間」とはどのような時間であり、どの時間に属しているのだろう。「人間を超える時間の流れ」は山頂だけではなく、本当は人間社会の下界をも貫いている。ただ下界は人間の社会で覆い尽くされて、下界を流れる時間は人間の社会のリズムに細かく切り刻まれ、人間を管理支配するリズムに変換されてしまったために、山頂に立ったときに感じるような「人間を超える時間の流れ」に直(じか)に接することはできなくなってしまった。手付かずの広大

な自然のなかでしか感じられなくなった「悠久（ゆうきゅう）」という言葉も、本当は人間が管理支配する時間のむこう側で生命を保っている筈だ。いつだって人間の外側を流れている時間は、「人間を超える時間の流れ」にほかならない。

１時間半の映画を凝視している観客は、５０分の映像と４０分の闇を見ていることに気がついているだろうか。１秒に２４コマの静止画が連続して映写されることで、人間の目には動画として見えるという原理に基づいて、映画は出現した。映写機は１秒間に２４回、まばたきするようにシャッターが閉じ、このシャッターが閉じてフィルムが入れ替わるのに９分の４秒かかっている。つまり、９分の４がフィルムの入れ替わり時間で、９分の５が映像時間ということになる。人間がある景色を何度もまばたきしながら見ていたとして、そのまばたき時間に全体の９分の４を要し、実際に目を開けて景色を見ていた時間は９分の５である、ということだ。しかし、映写機のまばたき時間を差し引いた、映像が映しだされている時間が全体の９分の５であったとしても、観客自身のまばたき時間も考慮するなら、観客が実際に映像を観ている時間は半分ほどかもしれない。

全体の９分の５ほどの映像しか映しだされていなくとも、観客はやはり１時間半の映画を観ていることには変わりはない。なぜなら、我々は喋っている人の言葉だけからではなく、沈黙からもなにかを聞き取ろうとするのと同様に、観客は闇の映像をも凝視しているからだ。１本の映画は９分の５の映像と、９分の４の闇によって成り立っているということ自体が大変興味深い。闇がなければ映像もありえないのである。人間が活動するためには闇の中に没し去る睡眠時間が不可欠である、ということにも通じているだろう。

決定的瞬間

「デジタルに埋没する写真」の危機を、「消えゆく『決定的瞬間』の問題として、東京女子大教授の黒崎政男が０１．９．１１付朝日で考察している。

《９０年代に加速度的に起こった根本的出来事は、文字、音、写真、動画などこれまでさまざまな物質的差異によって成立してきた情報が、マルチメディアやＩＴ革命という標語とともに、０と１とのデジタル情報に還元された、ということである。それらはすべてコンピューターで一元的に扱えるものとなった。スピーカーとアンプのオーディオ世界、万年筆と原稿用紙の文字世界、カメラとフィルムの写真世界など、従来、確固とした領域を形成してきた各ジャンルは、キーボードとディスプレーの中に、あるいは、携帯電話の手のひらの中に、溶けて崩れてしまっているのである。それぞれは、あらゆる情報のデジタル化の中で、情報の単なる〈一形態〉として埋没しはじめている。

特に〈写真〉がその確固とした存在感を失いかけて見えるのは、それが〈静止画〉、つまり動く映像である動画の単なる部分、単なる１コマとして扱われはじめているからである。デジタルテクノロジーは、動画にかんしても飛躍的な進歩をとげ、映像を、一定のスピードで切り替わる静止画の集まり、と捉えるようになった。つまり、ある出来事を動画であらかじめすべて撮影しておけば、あらゆる瞬間は、そこからのちにいつでも取り出せる静止画という形に退落してしまう可能性がある。伝統的な映画フィルムと

異なり、デジタルでは、撮影、保存にほとんどコストがかからない。人々はテクノロジーの進展によって、〈時間の流れ〉をすべて記録し〈過去〉を所有することが可能になった、ということなのだろうか。》

先に映画は１秒に２４枚コマの静止画が連続して映写されることで、人間の目には動画として見えるという原理が応用されていると書いたが、この原理には静止画が《動く映像である動画の単なる部分、単なる１コマとして扱われ》ていく、という逆転する関係が孕まれていた。静止画の集まりとしての映像という問題は動画を基軸にすれば、動画を構成する１コマとしての静止画、という見方を引きださずにはおかなくなる。それは極めて当然のことだ。だがこのことは、写真は写真であり、映像は映像であるというふうに棲み分けがきちんと確立している間は、なんの問題もなかった。ところが誰もが、手軽で利便性のあるデジタル映写機をカメラの代わりに持ち出す時代になった。写真家ですらデジタル映写機を肩にぶら下げるようになった。《ある出来事を動画であらかじめすべて撮影しておけば、あらゆる瞬間は、そこからのちにいつでも取り出せる静止画という形に退落してしまう》事態がやってきたのだ。カメラが不要になりつつあるということは、カメラで撮った写真も不要になりつつあるということである。

《従来写真とは、集団マグナムの中心的存在だったＨ・カルチェ＝ブレッソンの有名な写真集『決定的瞬間』（１９５２年）が象徴するように、とめどなく流れ去ってしまう〈時間〉をある瞬間で定着させ、まさにその一瞬が、時間の流れの全体を、あるいは、その事件や状況の本質をみごとに表現するようなメディアとして存在してきた。

写真が担ってきた〈決定的瞬間〉の記録は、しかし今後は、リアルタイムで行う必要はなく、のちにいつでもコンピューター操作で取り出せるたぐいのものになる可能性がある。つまり、今日〈写真〉にとって最も深刻な問題は、デジタルカメラと従来の写真との対立問題ではなく、写真は、デジタル動画映像に呑み込まれるか否か、という問題だと思われる。》

ここで大変重要な問題は、「決定的瞬間」が消えゆくことではなく、まさに「決定的瞬間」の世界そのものが消えゆくことにある。リアルタイムと直結しない「決定的瞬間」などある筈もなく、《のちにいつでもコンピューター操作で取り出せるたぐいのものにな》ったとき、「決定的瞬間」は死に、その世界も崩壊する。写真が《とめどなく流れ去ってしまう〈時間〉をある瞬間で定着させ》ることによって、問題や状況の本質を永遠につなぎとめる「決定的瞬間」の世界を失うことで、我々は一体、どんな人間的存在の本質を失うことになるのか。

《〈写真〉には独自の根源的特質が存在していると私は考えている。決定的瞬間を見定め、シャッターを切るという〈行為〉のうちには、〈時間という流れ〉と〈瞬間〉との間の（いささか大げさだが）弁証法的構造をみてとることができる。私なりに表現すれば、人間が有限的な時間性のうちに内在しながら、まさにそこから超越しようとする意志こそが〈決定的瞬間〉なのであり、実に、この〈行為〉こそ、写真を写真たらしめて

きたものなのである。対象が世界的大事件であれ、極私的でささいな出来事であれ、この流れと瞬間の弁証法的構造自体は、なんら変わるところはなく、ある瞬間にシャッターを切るという〈行為〉には決断、決定、自己認識という要素が深く入り込んでいる。写真とは、きわめて人間的な〈行為〉なのである。》

「決定的瞬間」というものがありうるという前提で書かれているとは思われないが、本当に「決定的瞬間」なるものは存在しているのだろうか。写真に詳しいとはけっしていえないが、それでも「決定的瞬間」にむかってシャッターを切ろうとする行為は存在しているだろう。もちろん、「決定的瞬間」とは撮られた写真に定着された一瞬の時間である以上に、《ある瞬間にシャッターを切るという〈行為〉》そのことであるのは、この個所からも伝わってくる。《人間が有限的な時間性のうちに内在しながら、まさにそこから超越しようとする意志こそが〈決定的瞬間〉なのであ》るという記述には、「決定的瞬間」を刻印しているとされる写真に還元されない認識が示されている。「決定的瞬間」を意図しているかどうかにかかわらず、そして出来不出来にかかわらず、写真はある意味ですべて、「決定的瞬間」としての時間を切り取っていることは間違いない。

　おそらく写真ほど「一瞬」にふさわしい創造行為はありえないだろう。言葉や音はその「一瞬」を持続させようとするけれども、写真にはそんな執着はない。「一瞬」は一瞬である。その「一瞬」に永遠が見出されるとき、あるいは永遠の「一瞬」としてしかどうにも形容できない感想を抱かされるとき、「決定的瞬間」という言葉が啓示のように舞い降りてくるのかもしれない。「決定的瞬間」について考えれば考えるほど、我々人間の存在そのものが「決定的瞬間」にほかならないように思われてくる。「決定的瞬間」のうちに我々は生まれ、育ち、死んでいく存在なのだろう。誰にとってもそれぞれの人生を「決定的瞬間」として始め、終えていくのである。《ある瞬間にシャッターを切るという〈行為〉には決断、決定、自己確認という要素が深く入り込んでいる》ということは、我々は自らの生涯において「決断、決定、自己確認」をたえず迫られながら、人生のシャッターを切っているということではないのか。

「決定的瞬間」という言葉が写真の発明とは無関係に生みだされたものなのかどうか、もしシャッターを切る「一瞬」によって「決定的瞬間」なる言葉が生みだされたかもしれないとすれば、デジタルテクノロジーによって「決定的瞬間」の世界が失われることは、我々が自らの人生のシャッターを切る世界の喪失にもつながっているのではないか。黒崎氏は《きわめて人間的な〈行為〉》としての写真の喪失として、次のように強調する。《コンピューターのうちに保存される動画映像では、あらゆる時間の断片が、いわば等質で蓄えられるために、逆に決定的瞬間は消滅してしまう。すべての瞬間はその前後との退屈な連続性のうちに没してしまうからである。しかしそれでも、２１世紀において、ひたすら自己展開していくデジタルテクノロジーは、写真を動画映像の単なる一断片として捉えつつ、写真からその独自の存在意義を剥奪する形で進行していくことだろう。》

２００５年９月７日記